

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第190集

明通遺跡発掘調査報告書

国道281号道路改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

明通遺跡発掘調査報告書

国道281号道路改良工事関連遺跡発掘調査

序

本県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら先人の貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私達に課せられた責務であると思えます。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策となっております。特に幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として多方面から期待されるところであります。

このような保護保存と開発という相反する目的を有する事業の調和のとれた行政施策が今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、県教委文化課の指導と調整のもとに開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する処置をとってまいりました。

本報告書は、県北部にある山形村内を通る国道 281 号改良工事に関連し、平成 3 年度発掘調査した明通遺跡の調査結果について収録したものであります。調査の結果、縄文時代前期・後期を中心とする遺物が発見されました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

おわりに、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助、ご協力を賜りました岩手県土木部久慈土木事務所、山形村教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成 4 年 12 月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 工藤 巖

例 言

1. 本報告書は、岩手県九戸郡山形村川井第 17 地割字明神 23-114 に所在する明通遺跡の調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、一般国道 281 号改良工事に伴い岩手県教育委員会と岩手県土木部久慈土木事務所の協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
3. 遺跡の岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡略号は以下のとおりである。
遺跡番号……JF 45-2203
遺跡略号……………AD 91
4. 調査期間・調査面積・調査担当者は、以下のとおりである。
平成 3 年 4 月 11 日～5 月 10 日、930 m²、高橋義介・花坂政博
5. 室内整理期間と整理担当者（執筆者）は、以下のとおりである。
平成 3 年 11 月 25 日～平成 3 年 12 月 27 日、花坂政博
6. 石質鑑定は、佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）に依頼した。
7. 土層の色調観察には、農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』を参考にした。
8. 本報告書の作成にあたり、次の方々から御指導・御教示をいただいた。（敬称略）
川向石造（山形村総務課長）、及川 洵（大船渡市立博物館）、佐藤嘉広（岩手県立博物館）、橋本孝一（山形村教育委員会）、千葉啓蔵（久慈市教育委員会）、桐生正一（滝沢村教育委員会）
9. 本報告書に掲載した実測図の凡例については、III. 調査経過と調査方法等によった。
10. 野外調査にあたっては、山形村川井地区の方々に御協力をいただいた。
11. 本遺跡から出土した遺物及び調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

<目次>

序
例言

<本文>

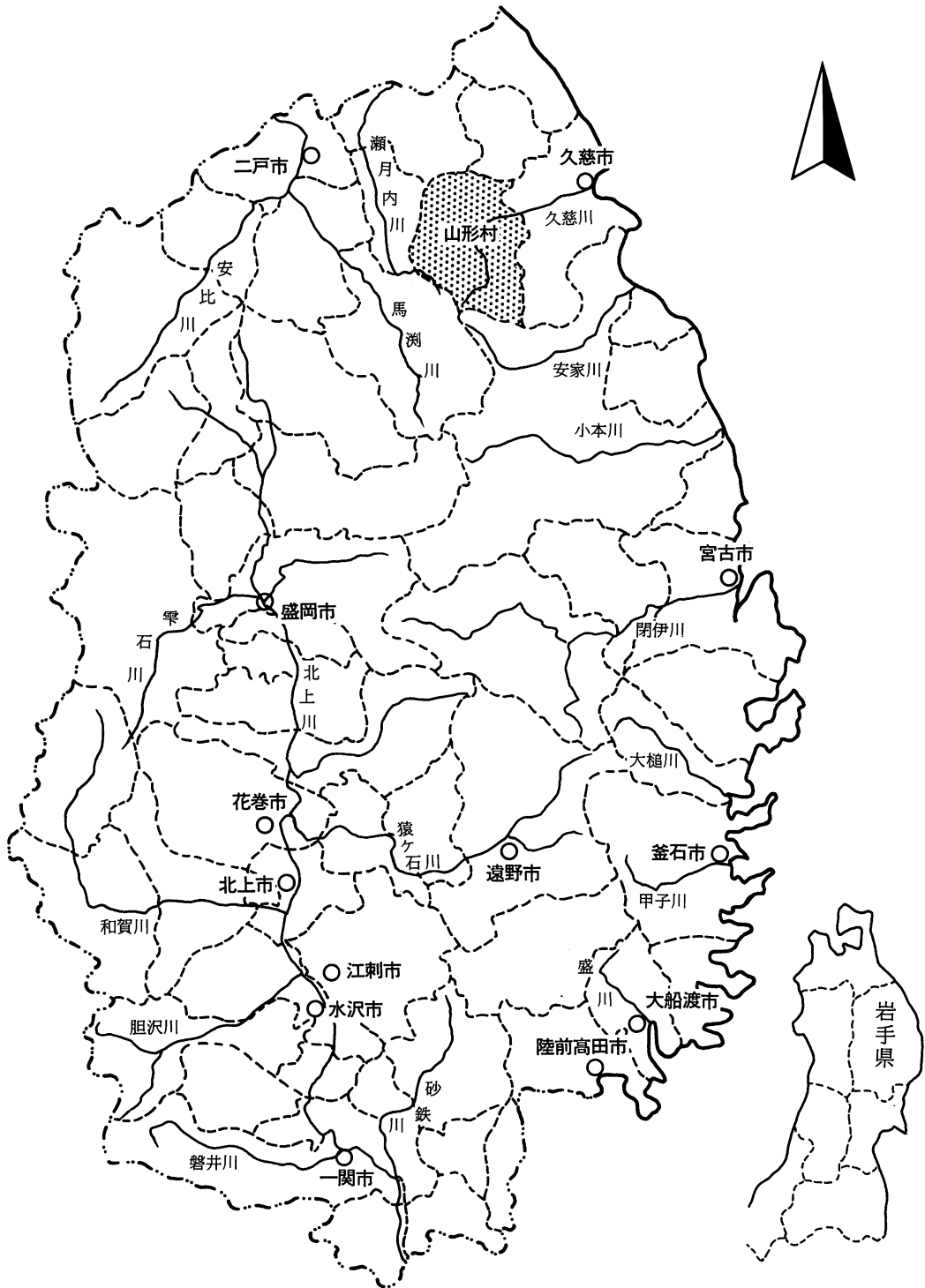
I. 調査に至る経過	3	3. 室内整理の方法	11
II. 遺跡の立地と環境		IV. 調査の結果	
1. 遺跡の位置	4	1. 検出された遺構	12
2. 地形と地質	4	2. 遺構外出土遺物	12
3. 基本層序	6	V. まとめ	
4. 周辺の遺跡	6	1. 遺構について	25
III. 調査経過と調査方法		2. 遺物について	25
1. 調査の経過	10	3. まとめ	30
2. 調査の方法	10		

<図版>

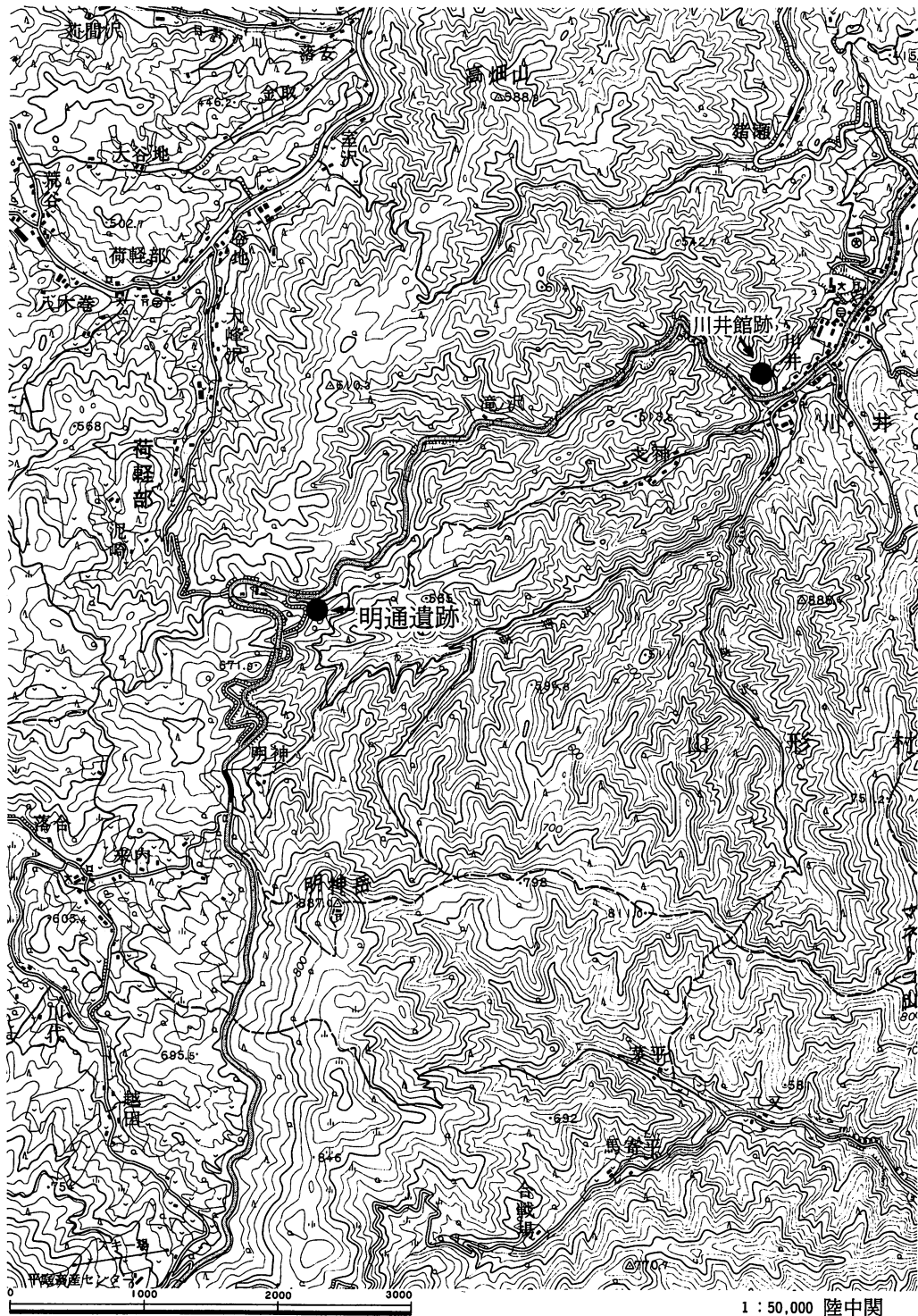
第1図 岩手県図における遺跡の位置	1	第8図 遺構外出土遺物(1)	19
第2図 遺跡位置図	2	第9図 遺構外出土遺物(2)	20
第3図 地形分類図	5	第10図 遺構外出土遺物(3)	21
第4図 基本層序	6	第11図 遺構外出土遺物(4)	22
第5図 周辺の遺跡位置図	8	第12図 遺構外出土遺物(5)	23
第6図 遺構配置図	13	第13図 遺構外出土遺物(6)	24
第7図 焼土遺構	14		

<写真図版>

写真図版1 調査区遠景	35	写真図版5 遺構外出土遺物(2)	39
写真図版2 調査状況・土層断面	36	写真図版6 遺構外出土遺物(3)	40
写真図版3 焼土遺構	37	写真図版7 遺構外出土遺物(4)	41
写真図版4 遺構外出土遺物(1)	38	写真図版8 遺構外出土遺物(5)	42



第1図 岩手県図における遺跡の位置



第2図 遺跡位置図

I. 調査に至る経過

国道 281 号は、岩手町沼宮内から北上山系を横断し、久慈市に至る全長約 81 キロメートルの幹線道路である。内陸と沿岸部を結ぶ重要な道路であり、かつては久慈街道と呼ばれていた。国道改良は、交通安全の確保を図るため昭和 62 年度に事業化し、昭和 63 年度に工事着手したものであるが、この事業に関連する埋蔵文化財の取り扱いについては、管理を委託されている久慈土木事務所と岩手県教育委員会との間で協議された。協議の経過については以下のとおりである。

平成元年 9 月 5 日付け「教文第 415 号」で平成 2 年度発掘調査事業の照会が県教育委員会から久慈土木事務所に対してなされ、平成元年 9 月 29 日付け「土総号外」で久慈土木事務所は事業の回答を岩手県教育委員会に対して行った。

平成 2 年 11 月 15 日付け「教文 709 号」で試掘調査の結果が久慈土木事務所に報告され、平成 3 年 2 月 7 日付け「教文 899 号」で、930 m²の調査を岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの平成 3 年度委託事業とすることとした。

久慈土木事務所と岩手県文化振興事業団との委託契約は平成 3 年 4 月 1 日であり、同年 4 月 11 日に発掘調査に着手したものである。

II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

明通遺跡は岩手県九戸郡山形村川井に所在し、山形村役場の南西約 4.6 km の国道 281 号沿いに位置している。遺跡の所在する山形村は、岩手県の東北部、北上山地の北部やや東寄りに位置し、北は軽米町・大野村、東は久慈市、西は九戸村、南は葛巻町・岩泉町の 6 市町村に隣接している。村の総面積は 295.61 km² と広大であるが、その 94% が山林原野でその谷間に遺跡の所在する川井地区をはじめとし、8 つの集落が点在している。歴史的にみると、南境の平庭峠から合戦場、馬寄平に下る道は、江戸時代久慈や野田に至る街道で、沿岸と内陸を結ぶ塩と鉄の道として重要な位置にあった。

国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図「陸中関」(NK-54-18-8) の図幅に含まれ、北緯 40 度 7 分 36 秒、東経 141 度 31 分 36 秒付近にあたる。

2. 地形と地質

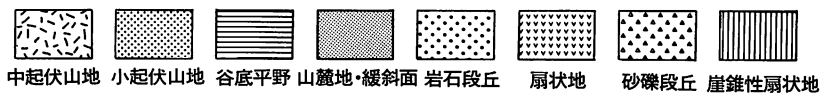
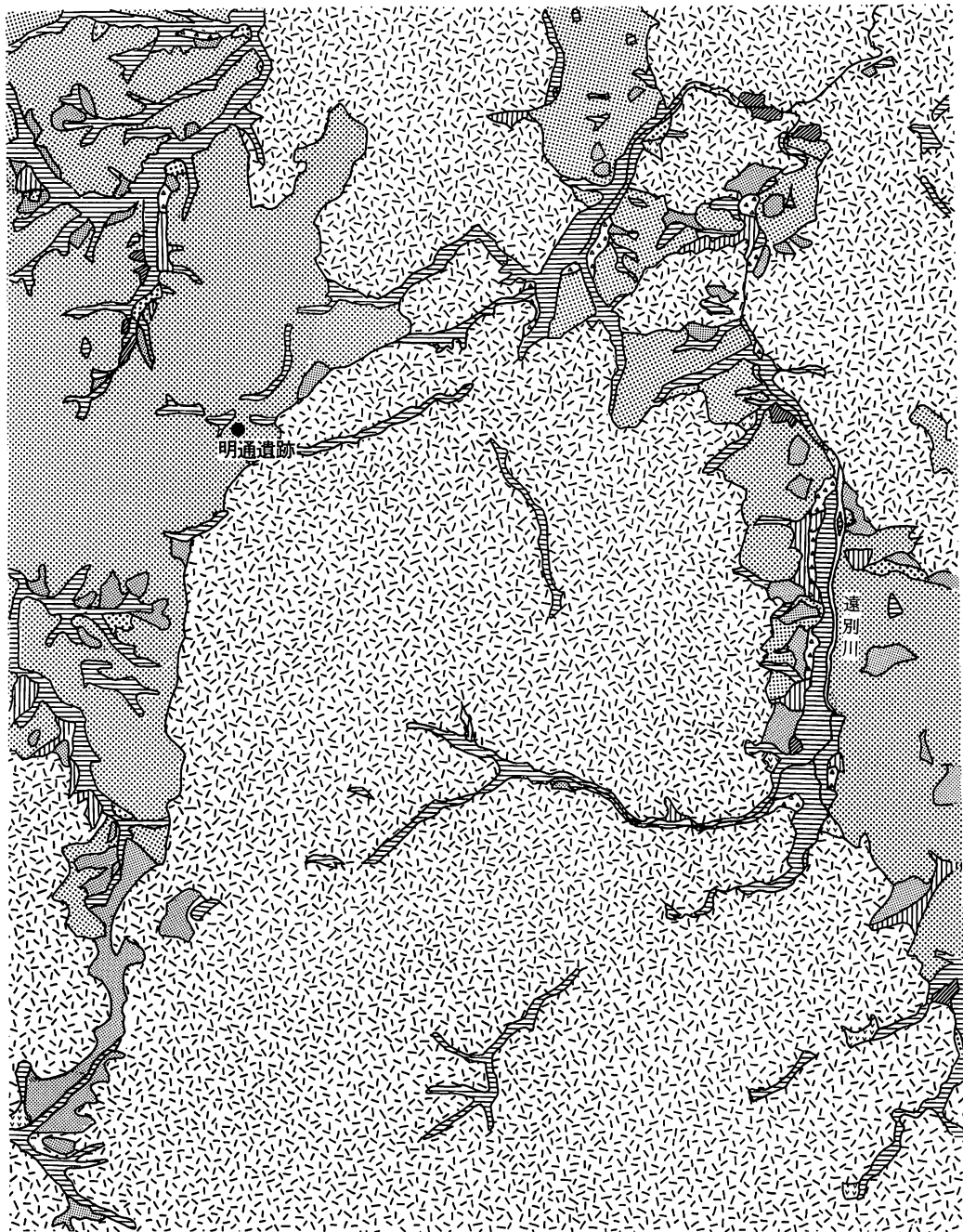
遺跡の所在する山形村は、東に寒長根山(720.8 m)、南西部に平庭岳(1059.8 m)・明神岳(887.0 m)・遠別岳(1168.8 m)、東南部に遠島山(1262.7 m)、マネドコ山(867.4 m)等、北上山地北部の高峰が村の南西部から南東部にかけて広がっている。また西部の九戸村との境を接する地域から北部の大野村、東部の久慈市との境を接する地域にかけては、北上山地の古い隆起準平原の原形地が残存する起伏量の小さな山地が広がっている。これら山地の峡谷に源を発する川井川、遠別川、そして村の北部を流れる戸呂町川、日野沢川など大小の河川に沿って谷底平野が点在しているが、山間部のため細長く分布し、しかも連続性に乏しい。その中で南部から西部にかけて大きく広がる明神岳山地の東側と西側の縁辺には、周囲を小起伏山地に囲まれた谷底平野が比較的広く発達している。これら谷底平野に接して、両側の山地より流出した土砂礫によって所々に小扇状地が形成されている。

本遺跡は、明神岳山地中の川井川にそそぐ、東流する小さな沢によって開析を受けた狭隘な谷底平野と、それに接する山地縁辺の緩斜面上にあり、遺跡を含む周辺の現況は山林となっている。標高は 533~535 m である。

地質は古生層が大部分を占め、他に中生層・第四紀層・花崗岩類等が分布する。古生層は北上山地北部型と呼ばれる砂岩、粘板岩、チャート、輝緑灰岩、石灰岩等から構成されている。また土壌は淡色黒ボク、黒ボク、褐色森林、乾性褐色森林等の土壌で占められている。

《参考・引用文献》

岩手県(1972):『北上山系開発地域土地分類基本調査 陸中関』



第3図 地形分類図

経済企画庁総合開発局（1974）：『土地分類図付属資料（岩手県）』

岩手県文化振興事業団（1989）：『管波 I 遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第 139 集

岩手県文化振興事業団（1990）：『葉ノ木沢遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第 154 集

金野静一他（1990）：『岩手県の地名』平凡社

3. 基本層序

調査区域内では、基本的には第 4 図に示すような層序が観察されるが、部分的には攪乱や土砂の移動により層序の乱れるところがある。本遺跡の基本層序は以下のように大別される。

第 I 層 黒色土（7.5 YR 1.7/1）現表土で遺跡全面を覆っている。大小の木根、草根が多い。層厚 8～30 cm。

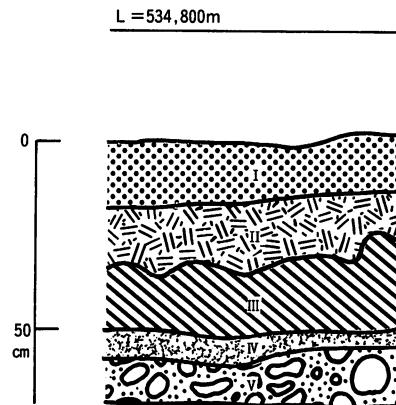
第 II 層 黒色土（7.5 YR 2/1）シルト質でやや固く粘りはあまりない。木根が多い。上位から縄文時代後期の遺物が、下位から縄文時代前期の遺物が出土している。層厚 7～24 cm。

第 III 層 黄褐色土（10 YR 5/6）固く締まりがあり粘性に富む。

黒褐色土（7.5 YR 2/1）やわらかく粘性に富む。層厚 7～26 cm。

第 IV 層 黒色土（7.5 YR 2/1）やや固く粘性に富む。層厚 4～18 cm。

第 V 層 褐色土（10 YR 4/6）固く粘性に富む。礫を多量に含む砂礫層である。層厚 30 cm 以上。



第 4 図 基本層序

4. 周辺の遺跡

これまで山形村で行われた本格的な発掘調査は、早坂平、高屋敷の両遺跡での調査例があるだけである。しかし、平成元年度から 3 年間にわたって実施された村内全域の遺跡分布調査などで、村内の埋蔵文化財の実態が次第に明らかになってきている。

遺跡の分布を概観すると、そのほとんどは村内を流れる主要な河川に沿って発達する谷底平野やそれに隣接する山地の緩斜面上に集中しており、縄文時代の遺跡に関してはその傾向が顕著である一方、製鉄関連遺跡の一部は山地中に存在している。また、中世の城館跡は丘陵地に存在している遺跡が多いものの、その周囲は平野部に面している。分布の状況を地域的にみる

と、川井、繋の両地区では、河川沿いにいくつかの遺跡が近隣にまとまって存在する傾向があるのに対して、戸呂町、日野沢地区では、河川沿いに広く分布しているという特徴が見られる。

本格的に調査された2つの遺跡のうち、まず後期旧石器時代の遺跡である早坂平遺跡からは、黒色頁岩製の石刃石核、珪質岩製の彫器と同種の石刃、黒色頁岩製の中～大型木葉形尖頭器、その他剥片等が出土している。調査報告書によると、遺跡は原産地遺跡として位置付けられているが、環境の変化とそれに対応する居住形態、石器製作のシステムの変化があったことも推測できるとしている。

もう一方の高屋敷遺跡は縄文時代、奈良・平安時代の集落跡で、3年間の調査で縄文時代の住居跡31棟、奈良・平安時代の住居跡26棟をはじめ、土坑、配石遺構、柱穴状土坑等が検出されている。遺物も、縄文土器、土師器、石器、鉄器、琥珀等多様で、村内での縄文、奈良・平安期の生活を解明する上での大きな手がかりとなる資料が出土している。

この他、村内の状況を通観すると、旧石器時代のものと思われる遺跡は、今のところ早坂平の他に3カ所存在すると見られる。

縄文～平安時代の遺跡は、縄文を中心に各地に多く存在するものと見られているが、住居跡が検出されたのは、前述の高屋敷遺跡のみであり、今後のさらなる調査が期待される。

中世の遺跡としては、本年度調査がおこなわれた川井館の他、現在のところ10余カ所の城館跡が確認されているが、関館など館の有無も含めてその所在が不明というものもいくつかある。規模的にはいずれも小規模で、戸呂町中輪館、荷軽部館、日野沢館等には狭隘な平場と共に堀跡と見られる遺構も残存している。

また、近世から近代にかけての製鉄関連遺跡も数多く存在している。

以上、村内における遺跡について概観してきたが、山形村における遺跡の調査はまだ始まったばかりである。今後、村内全域の分布調査が終了し、更に本格的な調査が進んでいくに連れて遺跡の数、実態も明らかになるものと思われる。

〈参考・引用文献〉

築部善次郎(1971):『二戸郡・九戸郡古城館趾考』

岩手県教育委員会(1986):『岩手県城館跡分布調査報告書』

岩手県山形村教育委員会(1989):『山形村遺跡分布調査報告書1』 山形村埋蔵文化財調査報告書1

岩手県山形村教育委員会(1991):『岩手県山形村 早坂平遺跡——原産地遺跡の研究——』

山形村埋蔵文化財調査報告書2

岩手県山形村教育委員会(1991):『山形村遺跡分布調査報告書2』 山形村埋蔵文化財調査報告書3



第5図 周辺の遺跡位置図

番号	遺 跡 名	種別	遺 構 ・ 遺 物	番号	遺 跡 名	種別	遺 構 ・ 遺 物
1	早 坂 平	散布地	石刃、尖頭器、石核、礫石器、剝片(旧石器)、縄文土器(前期)	18	尾 無 館	館 跡	未確認
				19	戸呂町外輪館	館 跡	犬走り?、平場
2	大戸の境久保	散布地	尖頭器(旧石器)	20	日 野 沢 館	館 跡	井戸跡、空堀
3	成 谷	散布地	石刃(旧石器)、縄文土器、土師器	21	野 場 館	館 跡	未確認
				22	円 館	館 跡	空堀
4	大 平	散布地	縄文土器、剝片(旧石器)	23	荷 軽 部 館	館 跡	空堀、腰郭?、土塁?
				24	安 堵 城	館 跡	未確認
5	大 谷 内	散布地	縄文土器(後期)、土師器	25	判 官 館	館 跡	平場、空堀、郭
6	沼 袋	散布地	縄文土器、土師器				
7	日 当 畑 I	散布地	貯蔵穴、縄文土器、独鈷石	26	成 谷 館	館 跡	空堀、郭
8	柳 久 保 I	散布地	縄文土器、土師器、陶器片、石器	27	関 館	館 跡	未確認
9	外 山 I	散布地	石器剝片	28	川 井 成 谷 館	館 跡	平場、空堀
10	外 山 II	散布地	縄文土器(後期)	29	木 沢 畑 鉄 山	散布地 製鉄跡	縄文土器(後期)、焼土、木炭層、鉄滓、坩堝、炉壁
11	間 瀬	散布地	縄文土器				
12	川 井	散布地	縄文土器(前期・晩期)				
13	大 峰 平	散布地	縄文土器、土師器(平安)、石器	30	栃 元 鍛 冶 (外山V)	製鉄跡 散布地	縄文土器、土師器、鉄滓、陶磁器片
14	高 屋 敷	集落跡	竪穴住居跡(縄文、奈良、平安)、配石遺構、縄文土器、土師器、須恵系土師器、石・鉄器、琥珀				
				31	繫 鉄 山	製鉄跡	排滓場、炉壁、ふいご羽口、大鍛冶滓、陶磁器、古銭、石碑 他
15	繫 大 矢 内	散布地	弥生土器	32	猪 瀬 鉄 山	製鉄跡	押立柱跡、高殿、排滓場、ふいご羽口、鉄塊、鉄製品
16	目 移	散布地	縄文土器、弥生土器				
17	戸呂町中輪館	館 跡	平場、空堀	33	川 井 鉄 山	製鉄跡	鉄滓、炉壁

※ 26、27については、遺跡の所在地に関する資料がなく第5図中には掲載していない。

周辺の遺跡一覧

III. 調査経過と調査方法

1. 調査の経過

- 4月11日(木) 発掘器材を搬入して調査事務所の設営を行う。
- 4月12日(金) 伐採木の枝葉と雑物除去作業を行う。
- 4月16日(火) 県教委文化課が行った試掘トレンチに沿って粗掘をはじめ。
- 4月23日(火) 粗掘と共に遺構検出作業を並行して行う。
- 4月25日(木) 基準点の設置と写真撮影を行う。
- 4月30日(火) 遺構の実測を開始する。
- 5月1日(水) 県教委文化課の調査終了確認を受ける。
- 5月8日(水) 遺構の精査を行う。
- 5月10日(金) 発掘器材を川井館跡調査事務所に搬出し現地を撤収する。

2. 調査の方法

(1) 調査区割りの決定

明通遺跡の調査区は東西19～55m、南北約24mで不整な台形の形を呈している。基準線となる中心線は可能なかぎり調査区の中心部にかかるように任意の2点を設定し、それぞれ基準点とした。

基準点1・2の平面直角座標第X系による成果値、及び杭高は、以下の通りである。

基準点1 X=14,305.323 m Y=59,105.225 m H=533.300 m

基準点2 X=14,301.120 m Y=59,085.672 m H=534.467 m

グリッドの設定にあたっては、基準点1と基準点2を結ぶ直線とこれに直交する直線を座標の基軸線とし、それぞれ15m毎に区画した。グリッドは南から北へ1～3、西から東へA～Fを与え、1A区・3C区などのように呼称した。

(2) 粗掘・精査

全て手作業で実施した。最初に雑物撤去の作業を行い、その後、調査区の東南部に予め設定してあった文化課のトレンチの部分を手掛りに更に掘り進めた結果、表土より約60～65cmで砂礫層に達した。そこで基本層序を確認したのち、全面にわたっての掘り下げを行った。

検出した遺構は焼土4基であるが、それらは1号焼土、3号焼土のように呼称した。

遺構の精査は全て2分法によった。

(3) 実測・写真撮影

遺構の実測図作成にあたっては、グリッド軸に合わせて1mメッシュを基本とする簡易遣り方測量を設定して行ったが、一部平板測量も併用した。遺構実測図は20分の1を基本としてい

る。

野外調査における写真撮影は、35 mm 版 2 台（モノクロ、カラー・リバーサル）と 6×7 cm 判 1 台（モノクロ）を使用して行った。

(4) 室内整理

遺物の注記については現場にておこなったため、室内では遺物ごとの仕分け、接合復元、遺物の写真撮影、拓本、遺物の実測、遺構・遺物のトレース、写真図版、遺構・遺物図版作成の順に作業を進めた。また、これらの作業と並行して遺物の計測、石質鑑定、原稿の執筆を行い報告書に掲載した。

(5) 図面

基本土層・遺構図面の縮尺は 20 分の 1、遺物図面の縮尺は、石器 2 分の 1、土器 3 分の 1 を原則としているが、器種の大きさに応じては一部縮尺を変えてある。

IV. 調査の結果

1. 検出された遺構

本遺跡から検出された遺構は、焼土遺構 4 基である。

1号焼土

1Cグリッドのやや東北部よりに位置する。検出面は第III層上面で、焼土の接する南側には第II層の黒色土が堆積している。平面形は不整な楕円形で、径37×32cmの範囲に、焼土が3cm程堆積して見られたものである。焼成部分はやわらかくもろい。焼土の周辺には、何の痕跡も検出されなかった。出土遺物はない。

2号焼土

2Cグリッドのほぼ中央部に位置する。検出面は第III層上面である。平面形は不整な楕円形で、34×39cmの範囲で広がり、最大層厚が5.5cm程であった。焼土の最下層から下方に3cm、南に12cmの場所から、表面の最長辺が25cm程の不整な直角礫が検出されたが、その他に焼土と関連すると思われるものは見当らなかった。焼成部分は明黄褐色で、他の焼土よりも明るく、密に堆積している。出土遺物はない。

3号焼土

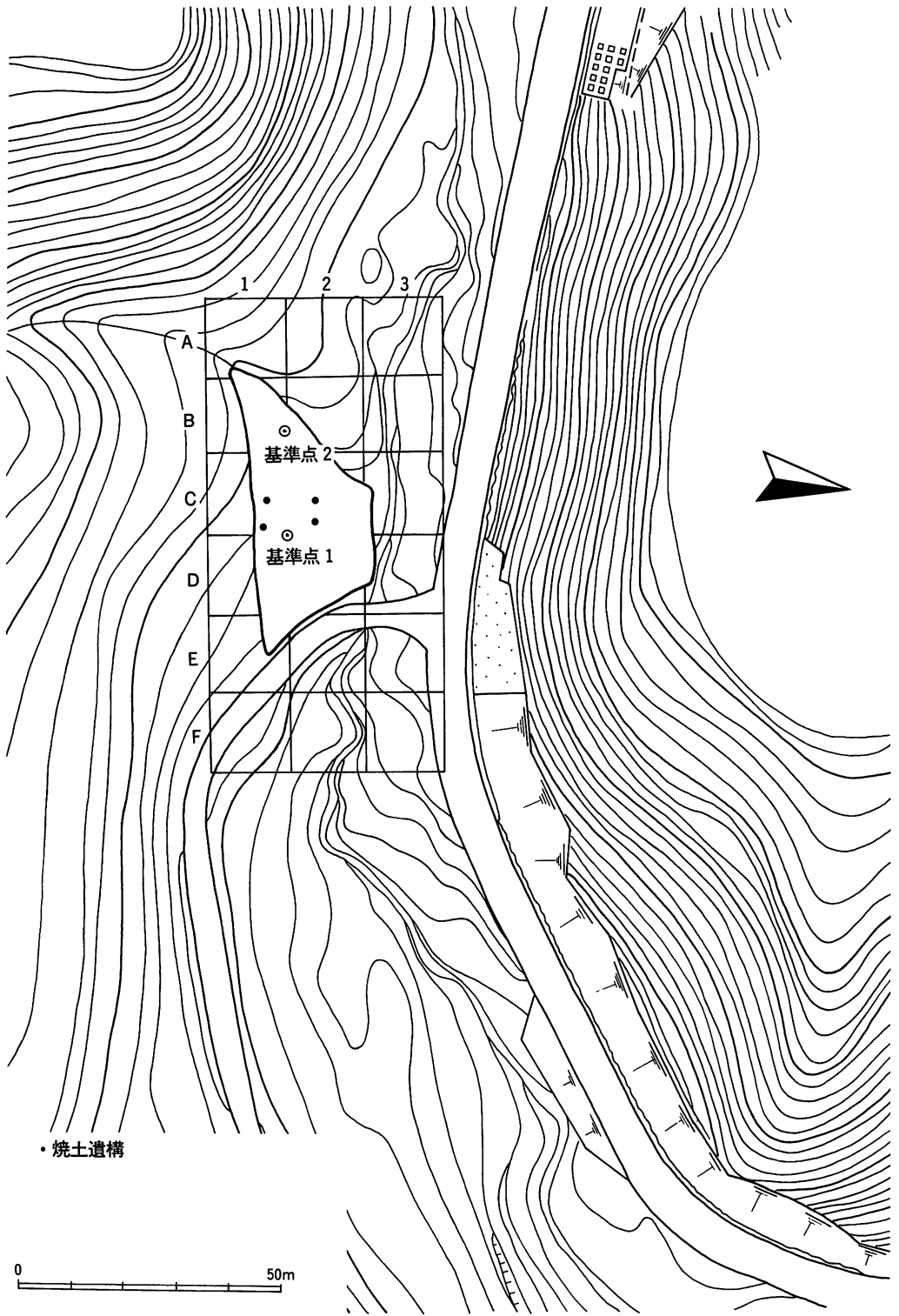
2Cグリッドの東部に位置する。検出面は第III層上面で、径63×57cmの範囲で広がり、最大層厚11.5cmと、今回発見された焼土遺構の中では、最も規模の大きいものであった。焼成部分はいくつかに別れているが、層の色、厚さなどから見て同時期のものと思われる。焼土面から北に17cmのところには縄文土器片が、半径28cm～150cmの範囲には、大小8個の礫の分布も見られたが、住居跡らしい痕跡は見られなかった。出土遺物はない。

4号焼土

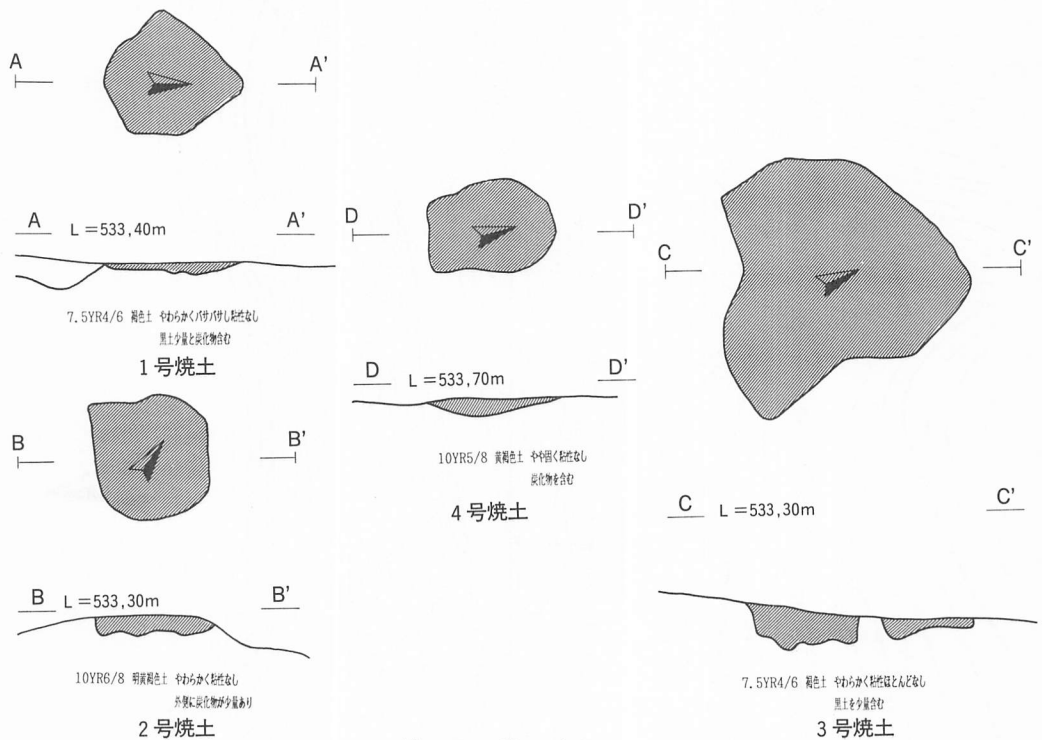
1Cグリッドの北部に位置する。検出面は第III層上面で、径34×26cmの範囲で広がり、最大層厚は4cm程である。他の焼土よりも焼成部分が固いが、現地性のものであるかどうかは確認できなかった。出土遺物はない。

2. 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、縄文土器が大コンテナ2箱程度、石器3点である。土器は全て



第6図 遺構配置図



第7図 焼土遺構

破片で、復元できるものは極めて少ない。

(1) 縄文土器

出土した土器は、縄文時代前期及び後期に属すると思われるものである。概ね第I群とした土器は縄文時代前期、第II群とした土器は縄文時代後期、第III群は縄文式土器の粗製土器である。

第I群土器

ここでは、縄文時代前期に属すると思われる土器を一括した。この群に属する土器には、ほとんどのものに植物性繊維が混入しており、主に第II層下部で出土している。尚、完形及び全容を知りえた土器が少ないため、分類に関しては器種について配慮しなかった。各類は次のように細分した。

a類：地文に単節縄文が施文されるもの

b類：地文に複節縄文が施文されるもの

c類：地文にS字状連鎖沈文が施文されるもの

d類：地文に羽状縄文が施文されるもの

第I群a類（第8図1～9、第6図10、写真図版4・5）

2・3・8・10は0段多状の斜行縄文が施文され、10は底部で網代痕が施文されている。7は今回出土した土器の中で、最も多くの部分が復元できた土器で、口縁部から体部上半にかけて復元できたが、体部はやや脹らみ、全面に施文がみられ、口縁部付近では横位に回転しているが、体部付近では斜めに施文される。完形は大型の深鉢になるものとみられる。5は底部で胎土が粗目で、小礫も含まれる。1は7同様、口縁部から体部にかけて単節縄文が施文されているが、7とは異なり、口縁部付近から斜めに施文されている。

第I群b類（第9図11～12、写真図版5）

体部下半破片1点、底部1点の計2点であるが、これは同じ個体であると思われる。厚手であり胎土には小礫、植物性繊維も含まれている。色は赤色で、裏面には指圧痕による凹凸がある。底部は不整な楕円形をしており、若干上げ底気味、焼成は良好で硬質である。完形は小型の深鉢になるとみられる。

第I群c類（第9図13～15、写真図版5）

体部3点である。全てにS字状連鎖沈文が施文されているが、色は13が14・15と比較すると、やや黒みがかった。植物性繊維が比較的多く混入している。

第I群d類（第9図16、写真図版5）

体部から口頸部にかかる部分1点であり、結束のある羽状縄文が施文されている。植物性繊維は全くといっていいほど含まれない。

第II群土器

ここでは、縄文時代後期に属すると思われる土器を一括した。主に第II層から出土している。第I群と同様、完形及び全容を知りえた土器が少ないため、分類に関しては器種をほとんど配慮しなかった。各類は細部の施文技法の相違により細分される。

a類：沈線文だけで文様が構成され、縄文が一切施文されないもの

b類：沈線文と縄文だけで文様が構成されるもの

第II群a類（第9図17～18、写真図版5）

18は口頸部から体部にかけての部分で、平行沈線文、入組状の沈線文によって施文されてお

り、薄手であるが焼成は良好である。17 は切断土器の上蓋である。焼成以前に切断されており、切断面は刻目状になっている。肩部には相対して突起があり、その部分に貫通孔があいている。また、沈線の部分を中心に、赤色顔料が塗布されていた痕が残存している。

第II群 b 類 (第9図 19～25、写真図版5)

このうち 20 と 24 は、沈線文と充填縄文により文様が構成されるもので、その他が沈線文と磨消縄文により文様が構成されるものである。21 は波状の口縁部で弧状および曲線文である。

第III群土器

ここでは、縄文式土器の粗製土器を一括した。本群に包括される土器を説明するために、以下のような便宜的分類を行った。

- a 類：口縁部に特徴をもつもの
- b 類：地文のみのもの
- c 類：底部に特徴があるもの

第III群 a₁類 (第10図 26～29、写真図版6)

口縁部が折り返し口縁になっているもの。27 は折り返しの部分に無節斜行縄文が施され、頸部は無文で、体部との間に撚糸文が1条施文された下部から、再び無節縄文が斜めに施文されている。29 は 27 と同様、折り返しの部分に無節縄文が施文されているのに対して、26 の折り返しの部分には単節斜行縄文が施文され、口縁部と無文の頸部の境目に撚糸文が1条施文されている。また 26 は焼成が非常に良好で硬質である。28 は口縁部から体部にかけて単節斜行縄文が広く施されている。

第III群 a₂類 (第10図 30～31、写真図版6)

口縁部に隆帯が貼り付けられているもの。30 は貼り付けの痕に伴う指圧痕もみられ、下には単節縄文が施文されている。31 は口縁部に粘土紐による隆帯が貼り付けられると共に、突起が2個つけられている。また、隆帯の部分に、僅かに単節縄文の施文がみられる。欠損部があり、その部分にも数個の突起があったものと思われる。

第III群 a₃類 (第10図 32～36、写真図版6)

折り返しまたは貼りつけ以外の特徴が見られるもの。32 は口唇部が平らになっている。34 は棒状刺突文が施文されている。35 は 36 と比べて磨滅が進んでいるが、両方とも口縁部の辺りから緩く外反し、口唇部が外側にそがれている。33 は緩い波状口縁である。

第III群 b₁類 (第11図 37～43、写真図版7)

地文として網目状撚糸文が施文されるもの。43 を除いてはいずれも口縁部である。41・42 は

二重の沈線が入っており、やや擦りの甘い原体で施文されている。41・42 とそれ以外の土器を比較してみると、色はどちらも同じ橙色であるが、41・42 以外の方がやや赤みがかった。また、41・42 以外の土器の胎土には石英の混入もみられるが、植物性繊維の混入については、明確には確認できない。一方、41・42 には植物性繊維の混入がみられる。37～39 は口唇部より 1.5 cm 下部より施文されている。

第Ⅲ群 b₂類 (第 11 図 44～50、写真図版 7)

地文として単節縄文が施文されるもの。44 は一部分のみの施文である。45・46 は共に体部上半から頸部の部分である。47・48 は黄灰～黒褐色で、48 は横位に施文されている。50 は口唇部下部から施文されている。

第Ⅲ群 b₃類 (第 11 図 51～53、写真図版 7)

地文として無節縄文が施文されるもの。52 は植物性繊維が多量に混入している。53 には条痕も見られる。

第Ⅲ群 b₄類 (第 12 図 54～55、写真図版 8)

単節縄文の他に施文が見られるもの。55 は条痕と共に刺突文が見られ、54 は爪形文が施文されている。

第Ⅲ群 b₅類 (第 12 図 56～62、写真図版 8)

b₁～b₄以外のもの。56 は擦糸文が施文されているものとみられるが、磨滅が進んでおり判読できない。57 は口縁部で、沈線と思われる文の痕が見られるが、はっきりとは確認できない。58 は擦糸文が短く所々に施文されており、胎土には砂粒が多く含まれている。59 は小破片のため文様は判読できないが、植物性繊維が密度濃く混入している。60～62 は底部で、いずれも無文である。

第Ⅲ群 c 類 (第 12 図 63～65、写真図版 8)

63 は網代痕、64・65 は木葉痕がそれぞれ見られる。

(2) 石器

出土したのは磨製石斧、砥石、不定形石器が各 1 点ずつの計 3 点である。

砥石 (第 12 図 66、写真図版 8)

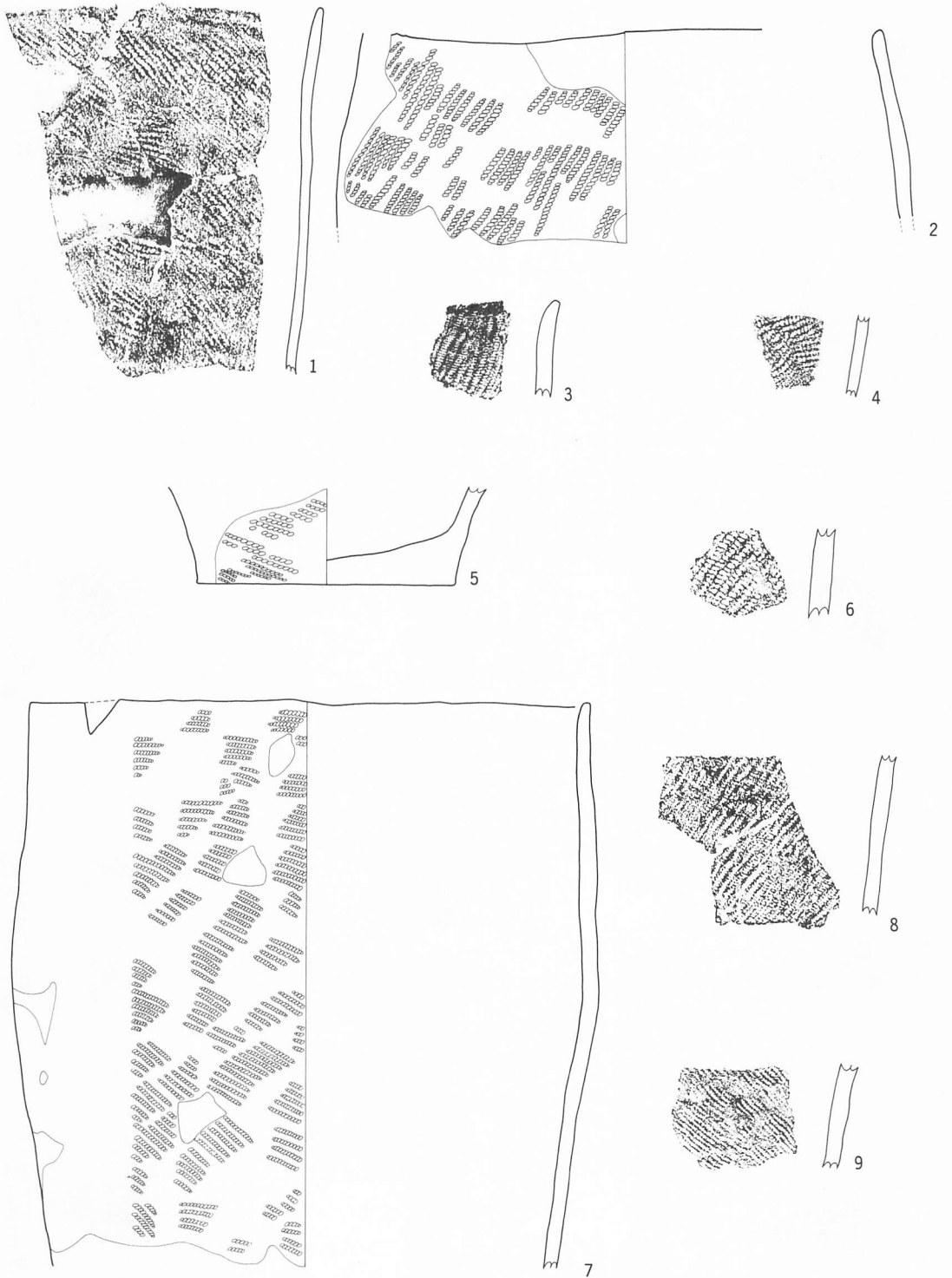
主に使われた表面及び側面に使用痕が見られ、石質は凝灰岩で、破損品であり、形状は不明である。

不定形石器 (第 12 図 67、写真図版 8)

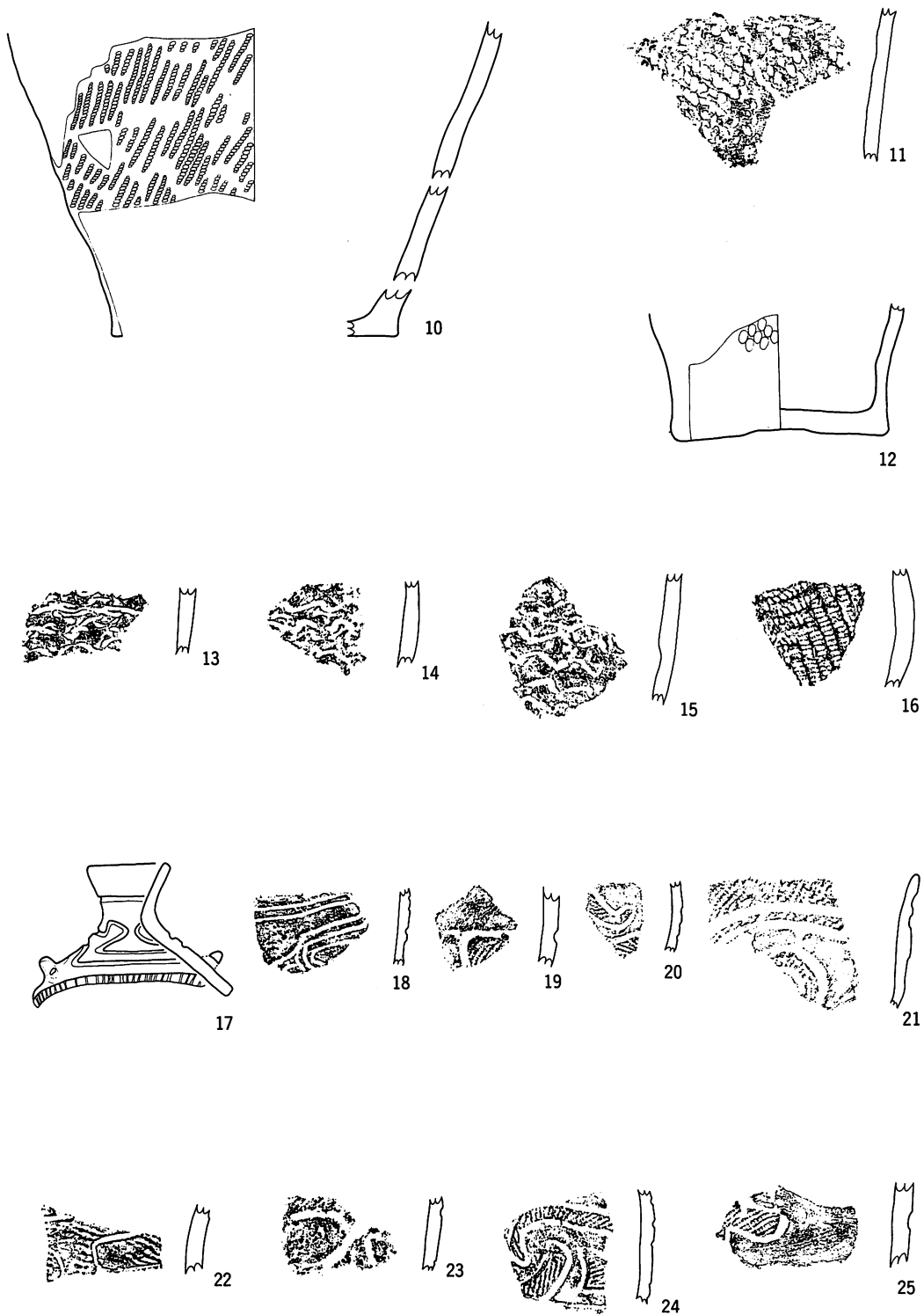
平面形は不整形で刃部を加工した痕は明確ではなく、僅かな剥離がみられるだけである。石質はチャートである。

磨製石斧（第 12 図 68、写真図版 8）

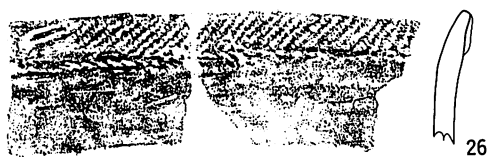
研磨された石斧で、石材は凝灰質硬砂岩である。刃部は欠損しているが、稜線部は比較的明瞭である。



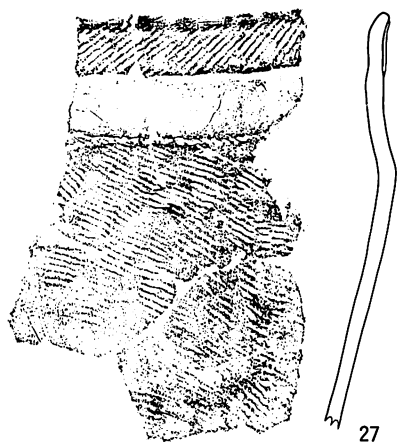
第 8 図 遺構外出土遺物(1)



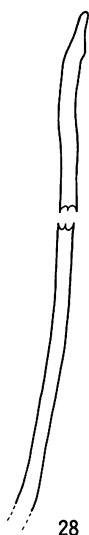
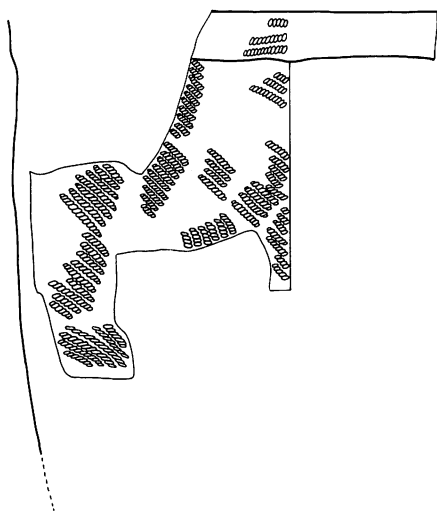
第9圖 遺構外出土遺物(2)



26



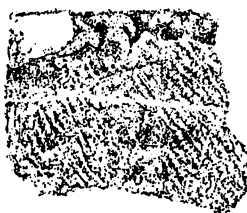
27



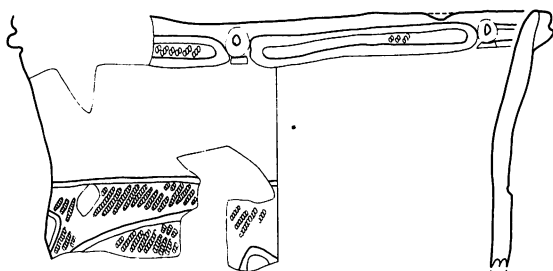
28



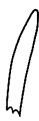
29



30



31



32



33



34

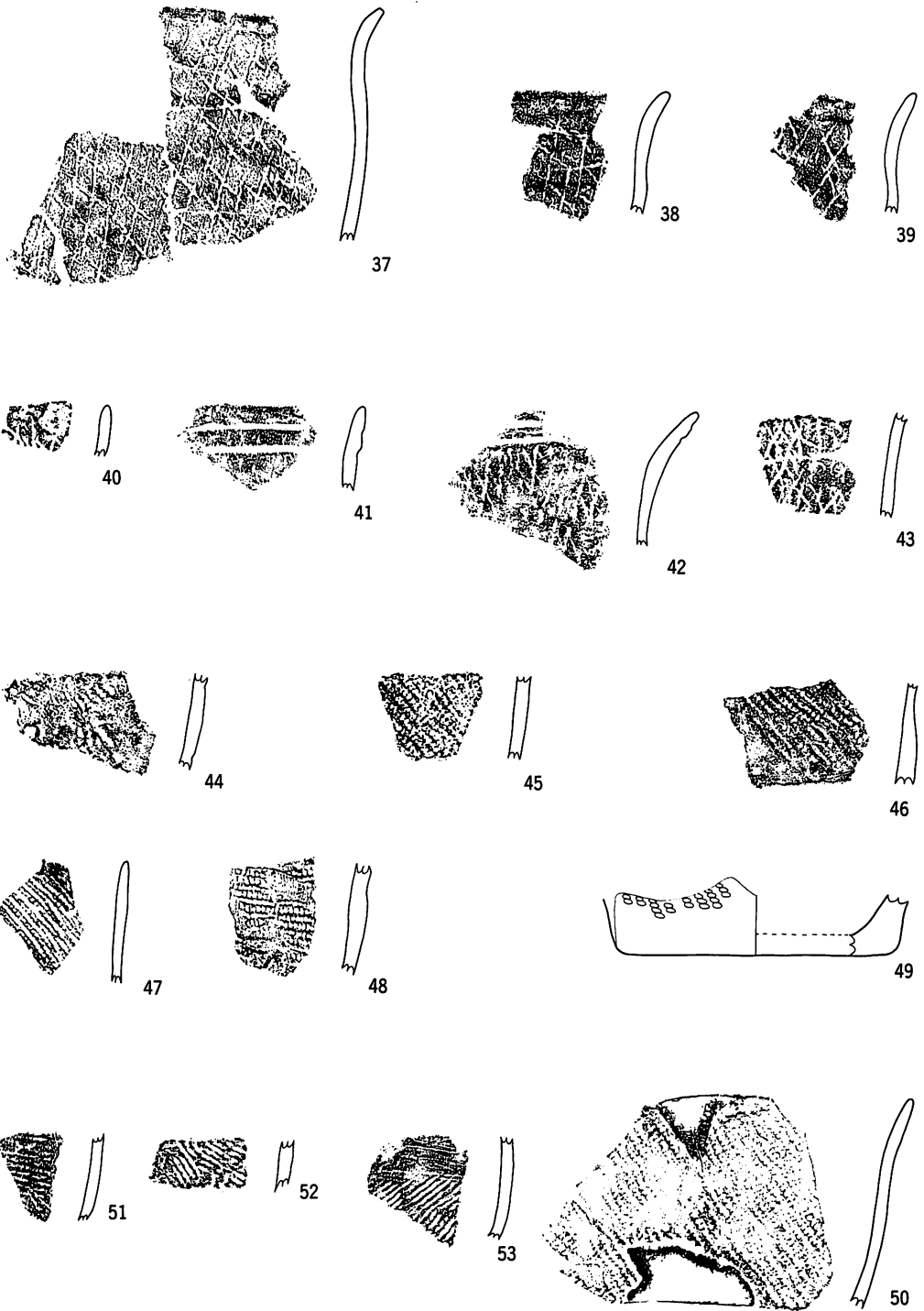


35



36

第10図 遺構外出土遺物(3)



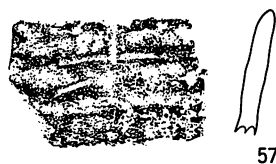
第11图 遺構外出土遺物(4)



54



56



57



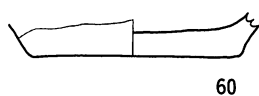
55



58



59



60



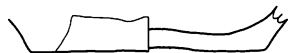
61



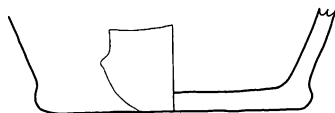
62



63



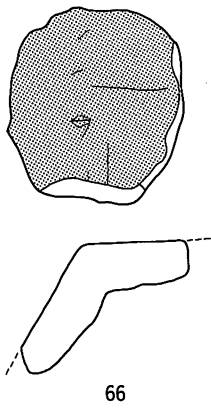
64



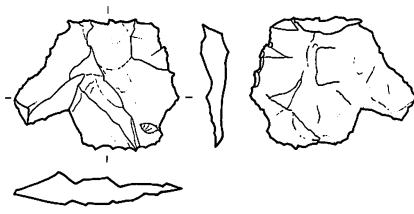
65



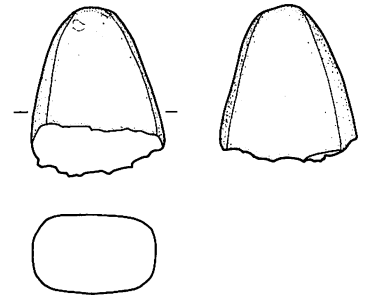
第12図 遺構外出土遺物(5)



66



67



68

第13図 遺構外出土遺物(6)

V. まとめ

1. 遺構について

今回の調査の結果、検出された遺構は焼土遺構 4 基のみであった。2 号焼土の下部から不整な亜角礫が検出されたり、3 号焼土の周囲から土器片等が出土したものの、結局、遺構に関連すると思われる遺物は皆無であり、遺構の時期、性格を特定することは不可能であった。

2. 遺物について

遺物は縄文時代前期・後期の土器と石器 3 点であったが、石器の出土は非常に少量であったため、ここでは石器には言及せず、土器のまとめを遺物のまとめとする。

(1) 出土土器の時期について

今回の調査の結果出土した土器は、縄文時代前期・後期に属するものであったが、大部分が小破片で出土し、復元できたものはほとんどなかったため、土器の編年は非常に困難であった。

その中から、先に遺構外出土遺物の項で分類した、3 つのグループ毎の大まかな特徴から、土器の時期について若干触れてみたい。

まず、第 I 群は縄文時代前期に属すると思われる土器の一群であるが、同群の特徴としては、①全般的に植物性繊維の混入が多いこと、②時期的には、結束のある羽状縄文、S 字状連鎖沈文などにみられる大木 2b 式辺りの時期に相当する土器が多いこと、③円筒下層式またはその影響を受けたと思われる土器がみられること、以上の三点で、県内で一般的に見られる縄文時代前期の主要な特徴がそのままあてはまるようである。

この中の b・c 類の土器は大木 2b 式に比定されよう。c 類は大木 2 式の特徴である S 字状連鎖沈文が施文されているが、b 類は底部が楕円形をしていることなどから、特定は出来ないものの、出土層位、そして胎土、焼成の状況が c 類と酷似しているところからみて、c 類と同じ時期と考えられる。d 類も決め手はないが出土層位や、結束のある羽状縄文が施文されていることなどから考えて、前述の 2 グループと同じ辺りの時期に比定出来るのではないと思われる。a 類については、植物性繊維を含んでいること以外、いずれも決め手に欠けることから、時期の比定はほとんど不可能であるが、7 は大きさ、隆帯の存在がみられない点、体部に僅かな脹らみがあること、内面が研磨されていること等から判断して、円筒下層 d 式の時期に比定できると思われる。また、以前この周辺で、木目状擦糸文が縦位に施文された円筒系の大型深鉢の一部が出土したこともあり、その辺りも併せて考えると、破片資料の中にも円筒系の影響を受けた土器が数点存在するものと思われる。

次に第II群であるが、ここでは沈線文、磨消・充填縄文を施した土器を分類の指標とした。a類は破片1片と切断蓋付土器の蓋部であるが、切断蓋付土器については後段に譲るとして、破片について時期を特定することは不可能である。b類についても破片資料が多く、特定することは難しいが、出土層位、文様などから判断して、後期前葉の時期にあたるものと思われる。

続く第III群では、縄文式土器の粗製土器を集めたが、第I群a類のように単節縄文は施文されていても植物性繊維の混入が見られない等、時期を特定できる決め手にかけてものは全てこの中に含めた。

a類の折り返し口縁をもつものについては、後期前葉の時期が考えられるが、その他の破片については、時期の特定は不可能である。

この他、同群ではb₁類に触れておきたい。同類は地文として網目状撚糸文が施文されている土器であるが、41、42は胎土に植物性繊維を含むことから、大木2b式の時期のものと考えられる。しかし、その他の土器については、植物性繊維の混入がはっきりとは確認できないことや、それぞれ胎土も異なることからみて、時期を特定することは困難である。

(2) 切断土器について

本遺跡から、県北部から青森県にかけてしばしば出土する、所謂「切断蓋付土器」・「切断壺形土器」（以下切断土器と呼称）と呼ばれる土器の上蓋が1点出土している。

当該土器については、先学により様々な考察がなされている（阿部：1985、成田：1986）が、ここでは成田氏考察の特徴分類（以下成田分類と呼称）を基本にし、過去当センターの調査において出土したいくつかの当該土器と比較しながら、本遺跡から出土した当該土器の特徴を明らかにしていきたい。

尚、ここで取り上げたのは、(a)軽米町駒板、(b)同君成田IV、(c)二戸市馬立I、(d)同馬立II、(e)同青ノ久保、(f)久慈市平沢I、(g)九戸村滝谷III、(h)同管波I、(i)浄法寺町飛鳥台地Iの各遺跡出土の遺物である（文中では(a)～(i)の記号をもって遺跡名とする）。

① 器形

当センターの調査で出土した切断土器は完形品が少ないため、器形の全体的な特徴、傾向を分類するにはかなり資料不足である。そこで、ここでは蓋部と体部の各々の特徴を中心に挙げてみたい。

まず蓋部は、口頸部と口頸部以外の部分、この2つにわけて比較する。

口頸部では、口縁部が平らで、口頸部が内反するものが大部分である。くの字状に内反するものもみられるが、ほぼ直線的にたちあがるものも数点ある。本遺跡の当該土器は比較的良好に内反している。

(a)から出土した中の2点ほどは、口頸部が破損しており、その状況はわからない。

口頸部以外の部分は、(ア)逆盃型、(イ)逆碗型、(ウ)釣鐘型の3タイプに分類できるようである。

(ア)については、裾部がほぼ45度の角度で直線的にのびているのが大部分である。(a)より出土したものの中には、裾部の角度が緩く、逆皿型といえるものも2点ほど出土しているが、ここでは(ア)のグループに入れておく。

(イ)の中では、(c)から、脹らみが他の物よりやや少なく、裾部が長い、(ア)との中間に位置するような器形のものも1点出土している。

(ウ)に該当する遺物は(e)から出土した1点のみで、(イ)よりも裾部が長く、脹らみの後は直線的に落ちている。体部下半からの切断である。

本遺跡から出土したものは、(ア)の器形に属する。

体部は、蓋部に比べて更に資料が少なく、(f)から1点、(a)から2点の計3点がほぼ復元できたものである。この他に(g)からは破片資料であるが、ある程度形状を推測できるものが出土しているため、これを含めて比較する。

(f)のものは、体部下半が外へ張りだす形状で、底部と体部の別れ目がちょうど張りだしている。(a)からの1点は体部中頃が張りだしており、同遺跡出土のもう1点は体部上半が張りだしている。しかし、(f)のものが、体部と底部を隆線で区画しているのに対して、(a)の2点は全体的に丸みを帯びた形状を呈している。破片資料の(g)のものは、体部中頃に脹らみをもたせているものの、(f)のものと同様、隆線が器面に多く使われている。器形はやや上半に脹らみをもたせている。また、(g)のものは蓋部と接する口頸部の径が大きいため、比較的大型の壺になることが推測される。

底面は(a)の2点は平底、(f)のものはやや上げ底気味であった。また、(a)から底部付近で切断した薄手の底部破片が出土しているが、これには底面の外郭に、沈線が1条巡っている痕がみられる。

本遺跡から体部の出土は全くみられず、当センターの出土遺物の傾向からその形状を推測することは難しいが、成田分類や県内の他の遺跡の当該土器に関する報告書などから、蓋部の形状から体部の形状がある程度推測でき、本遺跡の蓋部のように、口頸部がくの字状に内反し、(ア)の形状を呈するものは、体部中～下半が脹らむ型に対応する場合が多いようである。

② 文様

文様については、沈線文のみか、沈線文と隆起帯・隆起線を組合せた文様で占められ、それぞれ区画帯が構成されている。蓋部の文様をみると、波状入組文でいくつかの区画帯に分けられているものと、沈線または隆起線が1～2条口頸部の外郭に巡っているものとに分けられる。後述する突起部との関連でみると、隆起線が蓋部に施されているものは、そこに貫通孔がつい

ている。体部の文様は蓋部よりも複雑で、(f)・(g)両遺跡のものは、隆起線を基調にした文様が複雑に組み合わせられている。(e)の(ㄨ)型のもは、横長の楕円形が4列3段に組まれており、上から楕円が次第に大きくなる。

施文具としては竹ひご状の工具やそれに類似した工具を使用したものなどがみられる。

本遺跡出土のものは、波状入組文が横位に展開するタイプに属するが、蓋部の文様と体部の文様の違いについては、成田分類でも指摘されている通りであり、当センターの資料にもその傾向がみられることから、本遺跡の場合も体部文様の推測は困難である。

③ 突起部

ほぼ完形に近い(a)の2点をみると、蓋部及び体部の双方に貫通孔がついた突起がついているのは1点で、もう1点は体部上半及び下半に1組ずつ相対してついている。

蓋部だけのものでは、(a)が4点、(b)・(e)の両遺跡の各1点に貫通孔のついた突起が肩部に相対してついている。突起部がみられないのは、(e)・(h)・(i)の3遺跡から出土の各1点である。(h)・(i)のものは欠損しているため、明確にないとは言えない。しかし、(e)出土の(ㄨ)型のものには突起がつけられた痕はみられない。

体部のみのものをみると、いずれも相対する部分が欠損しており、(g)のものは1個の突起が確認できるが、(f)のものには突起が確認できない。

突起部のある土器については、いずれも上下に通る貫通孔がついており、(g)のものは長方形の貫通孔がついている。

本遺跡のものをみると、相対した突起に貫通孔がついていることは、他の遺跡と同じであるが、その突起部に貫通孔をはさむように各2個の棒状刺突文が相対してついている。これは他の遺跡のものにはみられない特徴である。

④ 切断技法

切断箇所については、一般的にみられるように体部上半と口頸部の接点で切断されるもの、体部下半底部寄りを切断するものの2種類に分けられる。前者のものがほとんどであるが、(a)・(d)の両遺跡からは底部の破片が、また(e)からは口頸部～体部下半（蓋部）が出土しており、後者のような切断技法を用いたことがわかる。

切断方法については、竹ひご状の工具で器表面に密に突き刺して切断している形と、篋状の工具で一気に切断した形の2種類が一般的であったが、(a)出土の底部寄り切断のものは、切断面が歯車のように等間隔で刻まれており、切断後に再調整を施したものとみられる他、同遺跡の蓋部(ㄨ)型のものに、切断面に刻み目が全くみられないものがあった。これも再調整を施したものである。また、(a)出土の口頸部を除いてほぼ完形の土器は、篋状工具で一気に切断した後、竹ひご状工具で蓋部と体部の切断面に密に刺突を施している。

切断面の角度は器内面にむかって45度の傾斜をなしているが、体部下半切断のものは、反対に器外面にむかって45度の傾斜をなしている。

本遺跡のものは体部上半、篋状工具を使用しているようであるが、突起部にあたる部分に細かい刻目がみられることから、一部に竹ひご状工具を使用している可能性もある。

また、成田分類指摘の蓋部に凸、体部に凹の切り込みを設けている土器は、本遺跡のものを含め、全体の半数以下であった。全体的に緩やかな凹凸がみられるのに対して、本遺跡出土の凸部は比較的明瞭である。

⑤ 顔料

赤色顔料の塗布の残存がみられたのは、本遺跡の他は(a)・(f)各1点があるのみである。顔料は塗布されないが、全体的に胎土が赤色系統のものが多く、ミニチュア土器的なものは、灰～黒色系統の胎土が多い。

本遺跡のものは、胎土はにぶい橙色で、そのうえから沈線部を中心に、赤色顔料が塗布された痕が残存している。

⑥ その他

他に本遺跡出土のもので目立つのは、胎土に石英が多く含まれていることである。これは本遺跡内の土器の中では、当該土器を含めて数点にしかみられない。内面をみると、他の遺跡のものは全てミガキがかけられているのに対して、本遺跡のものは、ツマミ部が磨かれているがその他の部分はナデ調整である。

以上、過去当センターで調査した際に出土した、主な遺跡の切断土器と本遺跡の当該土器を比較し、本遺跡の切断土器について、主に器形の特徴を明らかにするよう試みてみた。

この他に、現在室内整理中の軽米町大日向II遺跡から、これまでの当センターの調査によって出土した当該土器の中で最も大きいと思われるものが、ほぼ完形の状態で出土している。実測等も終了していないため詳しいことはまだ記す段階ではないが、口頸部外郭の文様等、他ではあまりみられない、ほぼ同じ大きさの不整な四角形が6つ口頸部を囲み、沈線、隆起線によって区画されるなどの特徴もみられる。

本遺跡の切断土器については他に伴出土器がなく、単独での遺構外出土のため、時期等についてははっきりしない点も多いが、出土層位、本遺跡内で出土した後期の土器片からみて、従来どおりの十腰内I式の範疇に含まれるものと思われる。また、性格・用途については諸説を鑑みてきたが、やはり特定は難しい。しかし、その特異な形状等から日用品として使用したとは考えにくいようである。

切断土器については最近その出土例も増してきているが、それらの例を見ると、比較的規模の大きい集落跡から出土する例が多いようである。その点では、本遺跡が今回の調査範囲内だ

けにとどまらない、遺構を伴う大規模な集落跡であったことを示唆しているようにも思える。

3. まとめ

調査の結果、本遺跡から焼土遺構 4 基と縄文時代前期及び後期の土器、石器 3 点が出土したが、住居跡等は全く検出されなかったため、遺跡の性格について解明するまでには至らなかった。遺跡の中心は今回の調査区には含まれなかったが、遺物の出土状況をみると、層的には、縄文時代前期の土器が第 II 層の下位から出土している例が多いものの、前後期の遺物が、あまり層的に違わないところから出土しているという例も一部にみられること、焼土も現地性のものなのか確認できないことなどから、遺構外の南側地域から流れて再堆積した可能性も否定できないと共に、遺跡の中心も斜面沿いの南側地域に存在している可能性がある。

遺物に関して、ある程度時期が推測できるものをみると、縄文時代前期のものが大木 2 式、縄文時代後期のものが、十腰内 I 式を含めた前葉の時期にほぼ絞られることから、当該時期、この周辺に人間の活動の場があったものと思われる。一方、円筒下層式の土器の中でも、若干、当該時期と異なる時期のものとみられる遺物の出土もあり、もう少し人間の活動があった時期が広がる可能性もある。

《参考・引用文献》

- 興野義一 (1967)：「大木式土器理解のために (I)」考古学ジャーナル No.13 ニューサイエンス社 P 1-18
興野義一 (1968)：「大木式土器理解のために (II)」考古学ジャーナル No.16 ニューサイエンス社 P 2-25
興野義一 (1968)：「大木式土器理解のために (III)」考古学ジャーナル No.18 ニューサイエンス社 P 10
興野義一 (1968)：「大木式土器理解のために (IV)」考古学ジャーナル No.24 ニューサイエンス社 P 1-19
興野義一 (1969)：「大木式土器理解のために (V)」考古学ジャーナル No.32 ニューサイエンス社 P 9
興野義一 (1970)：「大木式土器理解のために (VI)」考古学ジャーナル No.48 ニューサイエンス社 P 2-22
江坂輝彌編 (1970)：『石神遺跡』ニューサイエンス社
村越潔 (1974)：『円筒土器文化』雄山閣
一戸町教育委員会 (1978)：『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 I』一戸町文化財調査報告書第 1 集
大迫町教育委員会 (1979)：『立石遺跡』大迫町文化財報告書第 3 集
葛西励 (1979)：「十腰内 I 式土器の編年的細分」北奥古代文化第 11 号 P 1-9
成田滋彦 (1981)：「青森県の土器」縄文文化の研究 4 雄山閣 P 12-132
岩手県立博物館 (1982)：『岩手の土器』
岩手県埋蔵文化財センター (1983)：『君成田IV遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第 62 集
岩手県埋蔵文化財センター (1983)：『滝谷III遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第 49 集
熊谷常正 (1983)：「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」岩手県立博物館研究報告第 1 号 P 4-65
岩手県埋蔵文化財センター (1984)：『嶽II遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第 78 集
阿部芳郎 (1985)：「持ち運ばれる土器」季刊考古学 No.12 雄山閣 P 5-54
岩手県文化振興事業団 (1985)：『駒板遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第 98 集
成田滋彦 (1986)：「切断蓋付土器考」弘前大学考古学研究第 13 号 P 1-35
本間宏 (1987)：「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)」よねしろ考古第 3 号 よねしろ考古学研究会
本間宏 (1988)：「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)」よねしろ考古第 4 号 よねしろ考古学研究会
岩手県文化振興事業団 (1988)：『青ノ久保遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第 118 集

- 岩手県文化振興事業団（1988）：『飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第120集
- 岩手県文化振興事業団（1988）：『馬立Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第122集
- 岩手県文化振興事業団（1988）：『馬立Ⅰ・太田遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第123集
- 岩手県文化振興事業団（1988）：『平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第125集
- 岩手県文化振興事業団（1989）：『管波Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第139集
- 八戸市博物館（1990）：『特別展 縄文人の世界 — 縄文後期の生活と文化 —』

写真図版

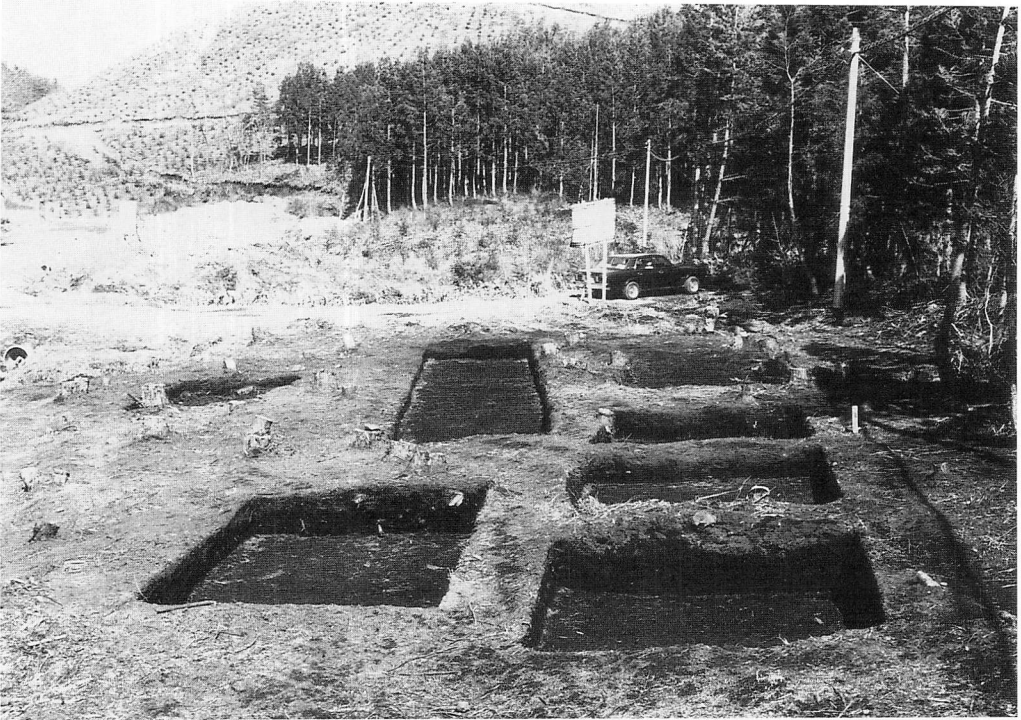


(東側より)

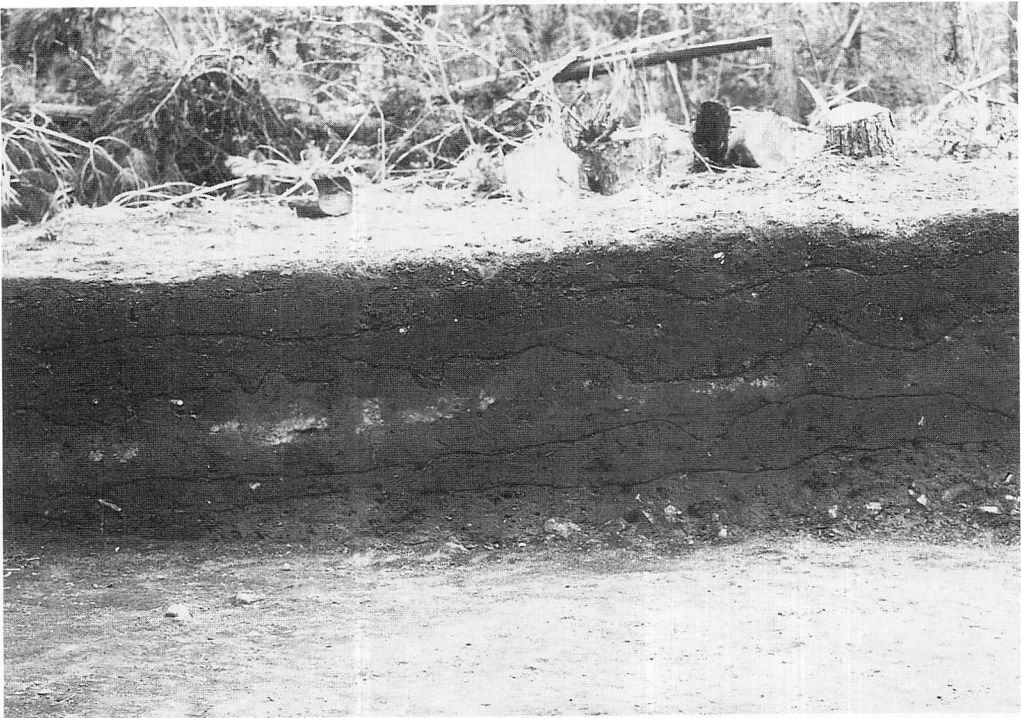


(西側より)

写真図版 1 調査区遠景



調査状況（西側より）

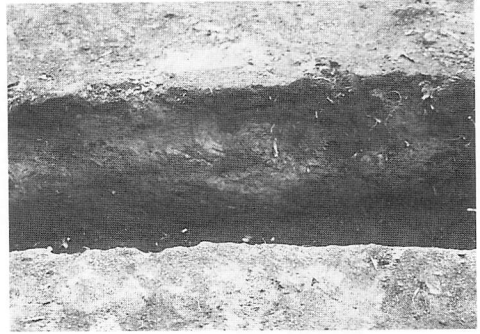


土層断面

写真図版 2 調査状況・土層断面



1号烧土平面



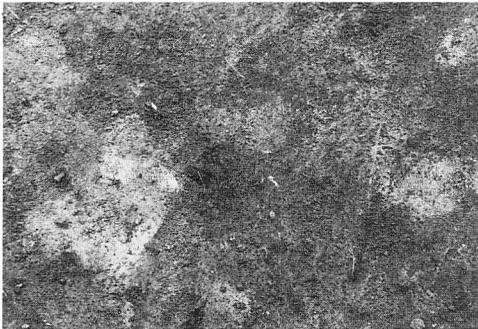
1号烧土断面



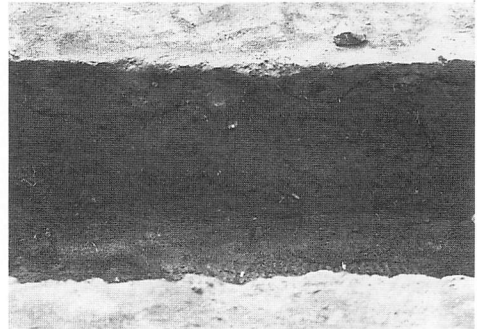
2号烧土平面



2号烧土断面



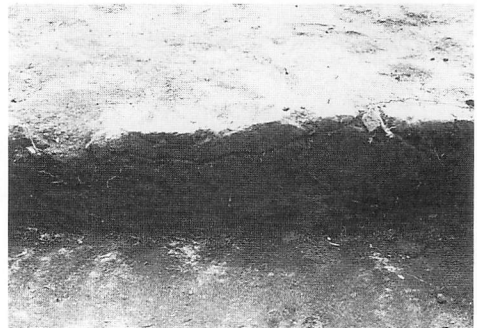
3号烧土平面



3号烧土断面

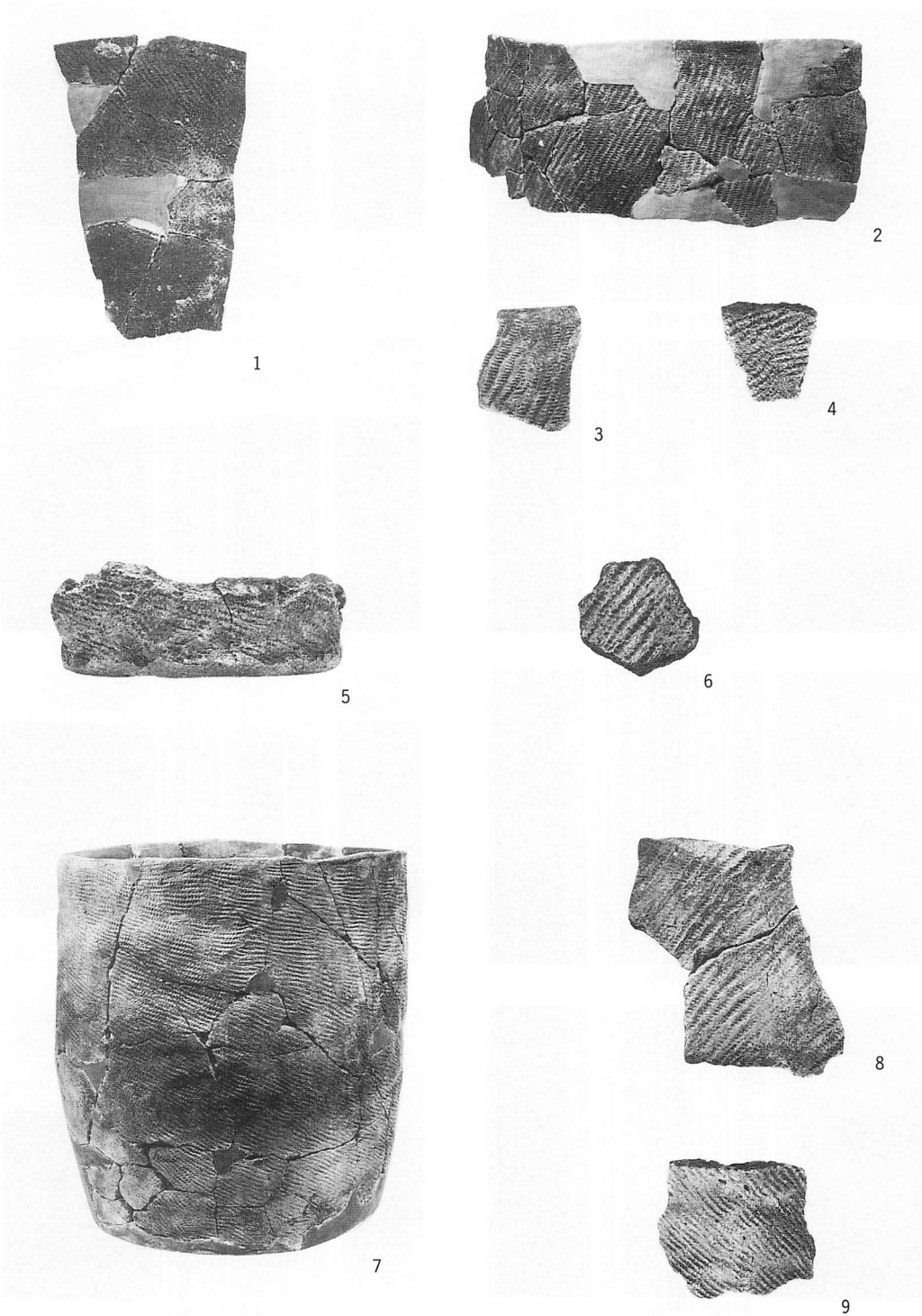


4号烧土平面

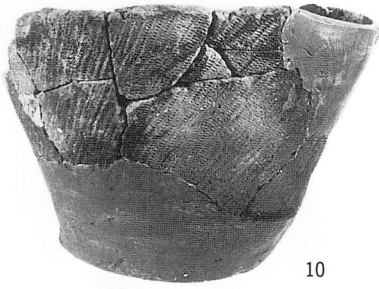


4号烧土断面

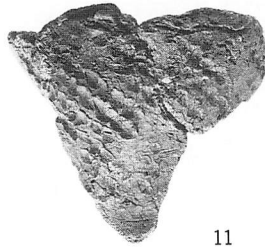
写真図版3 烧土遺構



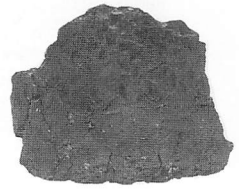
写真図版 4 遺構外出土遺物(1)



10



11



12



13



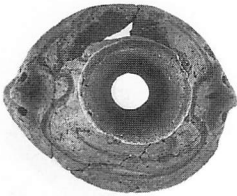
14



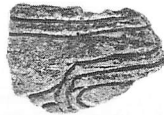
15



16



17



18



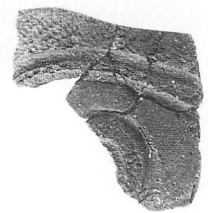
20



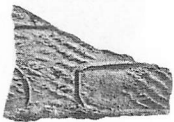
22



19



21



23

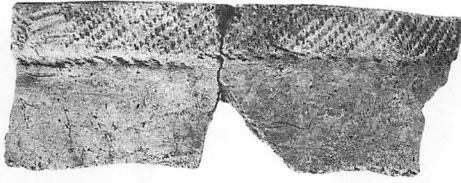


24



25

写真図版 5 遺構外出土遺物(2)



26



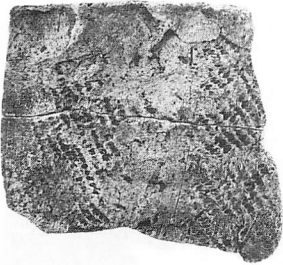
27



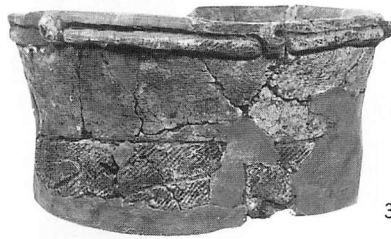
28



29



30



31



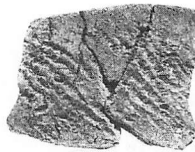
32



33



34

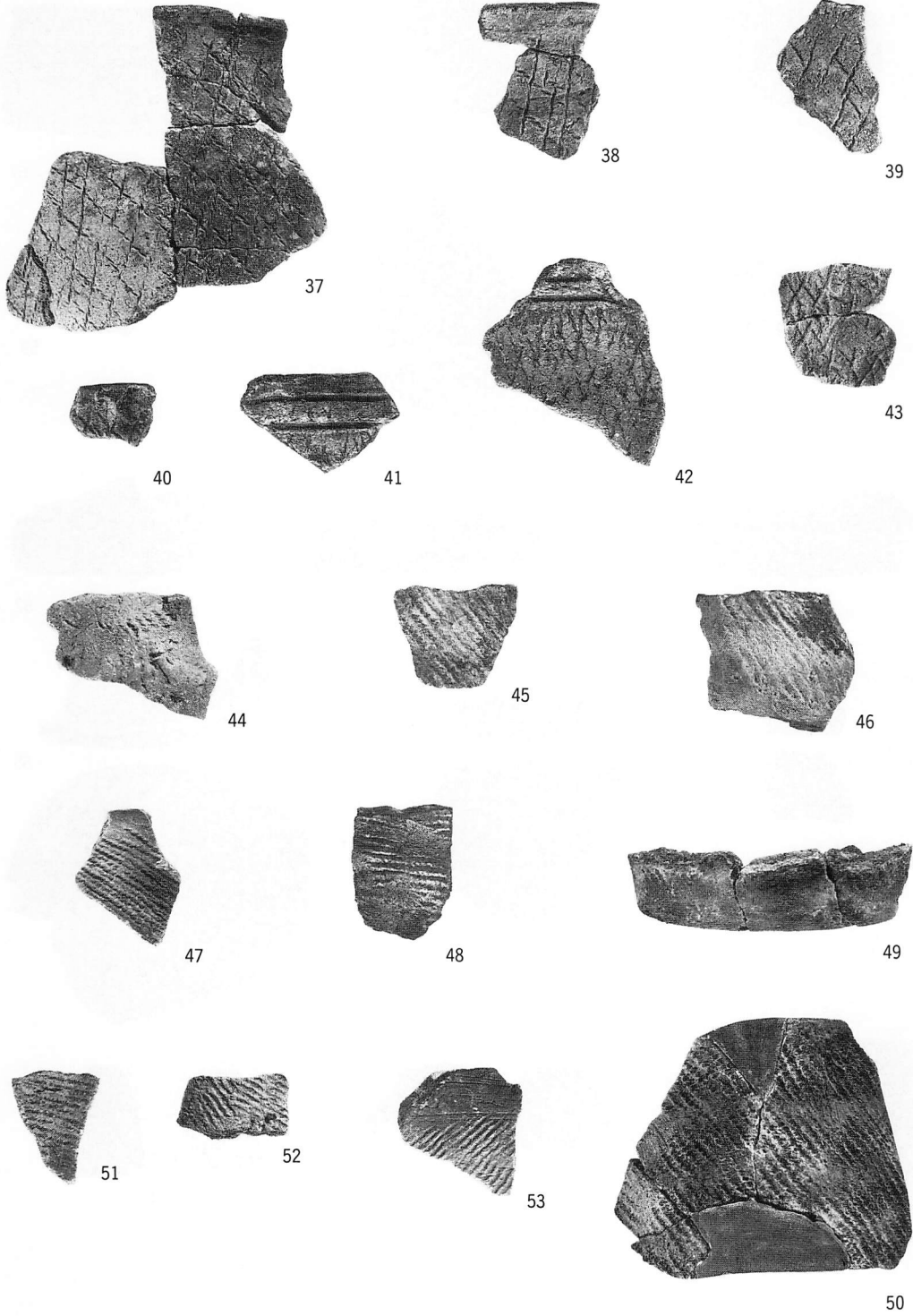


35

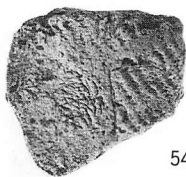


36

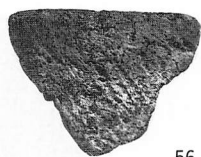
写真図版 6 遺構外出土遺物(3)



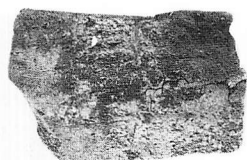
写真図版 7 遺構外出土遺物(4)



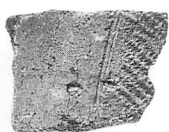
54



56



57



55



58



59



60



61



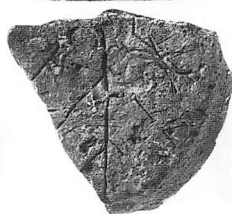
62



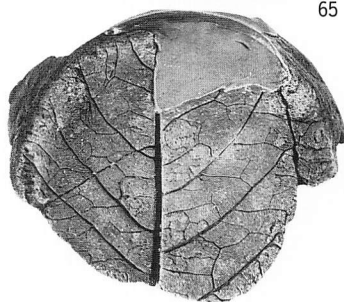
63



64



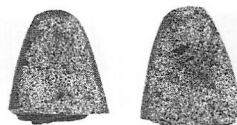
65



66



67



68

写真図版 8 遺構外出土遺物(5)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事 兼 小笠原 喜 一
 副所長 高橋 敬 明

〔管理課〕

管理課長(兼) 高橋 敬 明
 課長補佐 森岡 陽 一
 主任 佐藤 理

嘱託 根橋 文 一
 〃 吉田 十 次
 運兼 佐藤 春 男
 転事務士員

〔調査課〕

調査課長 村上 康 昭
 課長補佐 鈴木 恵 治
 〃 三浦 謙 一
 主任文化財 高橋 與右エ門
 専門調査員 工藤 利 幸
 〃 中川 重 紀
 〃 藤村 敏 男
 〃 高橋 義 介
 〃 高橋 正 之
 〃 渡辺 洋 一
 〃 佐々木 清 文
 文化財 齋藤 實
 専門調査員 佐瀬 隆
 〃 千葉 孝 雄
 〃 齋藤 博 司
 〃 東海林 隆 幹
 〃 佐々木 弘
 〃 川村 均
 〃 鈴木 貞 行
 〃 伊東 格
 〃 齋藤 邦 雄
 〃 神 敏 明
 〃 佐々木 信 一
 〃 小原 真 一
 〃 酒井 宗 孝

文門 松本 建 速
 化調 笹平 克 子
 査 花坂 政 博
 〃 佐々木 務
 〃 金子 昭 彦
 〃 濱田 宏
 〃 羽柴 直 人
 〃 星 雅 之
 〃 高木 晃
 〃 鎌田 勉
 期 鎌田 精 造
 専 阿部 勝 則
 門 千葉 悟
 職 熊谷 博 由
 員 新倉 信 一郎
 山口 博 英
 小山内 透
 柳田 磨
 田中 元 明
 菅原 敬 悦
 工藤 剛 司
 高橋 英 樹
 溜 浩 二郎
 佐藤 修 一

〔資料課〕

資料課長 村松 義 夫
 文化財 高橋 一 浩
 専門調査員

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 190 集

明通遺跡発掘調査報告書

国道 281 号改良工事関連遺跡発掘調査

印刷 平成 5 年 3 月 25 日

発行 平成 5 年 3 月 31 日

発行 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市下飯岡 11-185

TEL (0196) 38-9001

印刷 山口北州印刷株式会社

〒020-01 盛岡市青山四丁目 10-5

TEL (0196) 41-0585